

## 令和4年度地域貢献特別支援事業実施報告書

名古屋大学大学院国際開発研究科  
研究科長・教授 岡田亜弥

### 1. プロジェクト名

地域コミュニティの協働をベースにした退避者受入れと共生社会実現のためのモデルづくり

### 2. 実施内容

#### 1) 退避者および帯同家族の生活サポート：

退避者から支援ニーズを聞き取り、学内外の外国人・留学生雇用支援組織、NPOs、関係職員宿舍自治会等の協力を得て、生活サポートの促進のためのネットワークを構築し、必要な支援を提供できる仕組みを構築した。

具体的には、本学教育推進部国際連携課との連携により、アフガニスタン・アカデミック・フェロー（以下、アフガンフェロー）のニーズの把握に努めるとともに、研究科内でも定期的にアフガンフェローとの面談の機会を持ち、状況の理解を図った。また、アフガンフェロー家族が入居した職員住宅（滝の水住宅）の管理人を通じて当該住宅における生活状況の把握にも努めた。

住民側から指摘された事項については、アフガンフェローと共有し、ごみ捨てや公園の使用に関するルールなど、当該住宅の諸々の生活ルールについて周知し、アフガンフェロー家族側の理解を深めた。入居当初は当該住宅の住民からさまざまな不満や苦情が寄せられたものの、これらの対応の結果、こうした不満の声や苦情はほぼ解消し、むしろ、住民の間にさまざまな自主的な支援の輪が広がったことは特筆に値する。

学校や保育園への対応については、受入教員や事務補佐員が学校や保育園側の問い合わせ・相談にきめ細かく対応した。受入当初は、学校側に戸惑いもあったようだが、学校側ならびに日本人児童の保護者側は非常に親切に対応し、きめ細やかな配慮がみられた。職員住宅に居住する同学年の母親たちが自主的に、学校から子どもたちが持ち帰るプリント資料の和訳を手伝い、連絡事項の周知に協力したり、学校や保育園から保護者に準備を求められる布製袋のミシン縫製を手伝ったり、といったように自主的なサポートが継続的に行われたことは、こうした一例である。

こうしたアフガンフェロー家族・日本人地域住民双方の努力の結果、受入小学校（滝の水小学校）では、PTAがアフガンフェローをゲストに招いてセミナーを開催し、アフガニスタンの政治状況、文化などについて日本人保護者の理解を促進する機会も提供された。

## 2) 日本語サポート：

アフガニスタンからの退避者および帯同家族が地域社会や学校に円滑に適応し、就労機会を得るには日本語能力の獲得・向上が不可欠である。そこで、アフガンフェロー（元留学生）には、本学留学生向けの日本語クラス受講を勧めた。家族向けには、NUFSAが提供する留学生家族向けの日本語クラスを開講している日本語講師2名に、交代で、職員住宅の集会所において週2回（1回90分）、計43回（合計64.5時間）にわたり、日本語教室を開講していただいた。7名の受講生（全員女性）が参加した。

NUFSAの留学生家族向けの日本語教室で使われるテキストが使用されたが、医療機関でのやりとりなど実際に生活を行う上で必要な基礎的な日本語の習得に重点が置かれた。日本語講師2名は大変親身かつ丁寧に指導にあたり、アフガンフェロー家族（特に配偶者）が基礎的な日本語を習得し、学校・保育園、医療機関、行政との関わりなど、日本社会に適応するための重要なステップを提供していただいた。

具体的には以下のとおり、日本語教室を開講した（経費を本事業から支出）。

- ① 日本語教室講師：水野百々世氏、邊見香苗氏
- ② 期間：2022年9月21日（水）～2023年3月22日（水）、毎週月・水曜 10：00～11：30
- ③ 使用テキスト：「いろどり 生活の日本語入門（IRODORI Japanese for Life in Japan A1）」（国際交流基金監修）（最終授業で18課まで終了）
- ④ 受講生：7名（受入部局別：国際開発2名、工学3名、医学1名、生命農学1名）
- ⑤ 日本語講師による終了后感想・講評（2023年3月23日）（原文のまま）：  
「受講生は慣れない日本での生活や子育てに忙しくしながらも、意欲的に日本語学修に取り組んでいました。宿題もしっかりと取り組み、教師からのLINE連絡にも必ず返信をしてくれて、彼女たちの誠実さを感じました。日本語習得については、母語と全く違う言語ということもあって苦勞されていましたが、年明けからはめきめきと上達していました。授業最終日には、今後も日本語の勉強を続けたいので、オンラインの

日本語クラスがあれば紹介して欲しいと依頼されました。

また、彼女たちからは、日本語教室のおかげで生活が楽になったと感謝されましたが、これはシッターボランティアの皆さんのほか、滝の水住宅の住民の皆さまなど多くの方の温かいサポートや交流があったからだと思います。

4月から新しい場所で彼女たちの生活が始まります。生活が落ち着くまで大変だとは思いますが、日本語学修の継続のほか、地域住民の方々と交流をして住民の一人として活躍し、充実した生活を送られることを願っています。」(邊見先生)

⑥ 旧アフガンフェローの配偶者向け日本語教室への参加：

2022年10月に本研究科博士後期課程進学した2名のアフガンフェローおよび帯同家族は、本学による支援スキームの対象を外れることになり、職員住宅を退去し、大曾根の県営住宅に転居した。その結果、滝の水住宅で実施されていた上記の日本語教室への参加は、自家用車を持たない彼らにとっては地理的に遠く困難になったことから、当該アフガンフェロー2名およびそれぞれの配偶者は、東山レジデンスで開講される留学生家族向けにNUFSAが開講する日本語教室に参加することとした(月謝を本事業から支出)。

3) 託児サポート：

上記の日本語教室に参加する避難者家族には乳児・幼児を連れて参加する母親が多く、子どもに気を取られて授業に集中できないという状況が生じたため、住民に託児サポート支援を呼びかけたところ、計6名(居住する名大・名工大職員の配偶者)がシッターボランティアとして参加した。

職員住宅(滝の水住宅)集会所で日本語教室の授業がスタートした際、ほとんどの参加者(アフガンフェローの配偶者)は、乳幼児を含む、子どもを同伴して参加していた。そこで、検討した結果、当該職員住宅で、シッターを募ることとした。管理人に依頼してポスターを掲示し、公募したところ、6名の応募があった。これら6名が交代で、2~3名ずつ、各授業時に、集会所の一部で子どもを遊ばせた。(別添資料1参照)

これらシッターボランティアとの意見交換の場をもつため、オンライン意見交換会を以下のとおり、開催した。

① 日時： 2023年1月31日13:00~14:30(オンライン)

② 参加者： シッターボランティア(滝の水住民)5名(6名のうち1名は欠席)

③ シッターボランティアから寄せられた意見：

・「乳幼児なので、安全に遊ばせることに注力した。慣れてくると子供たちも勝手がわかるようになり、スムーズに遊ばせることができた。」

・「海外の子どもたちと接するのは初めての経験だったが、しっかりしていて感心した、聞き分けもよく、行儀もよかった。とはいえ、最初は、集会所の外に飛び出してしまう子どもがおり、けがをさせないように、安全面で配慮が必要だった。文化や言葉の違いはあるが、絵本等を用意したところ、日本の子どもたちと同じように反応しており、興味深かった。それぞれ好きなおもちゃがあるようだったが、取り合いのけんかは起こらなかった。子どもたちの年齢に幅があったが、年齢・発達段階に合わせた遊びを提供することはやや難しく、遊びの幅が広がらなかった。子どもたちもだんだん慣れてきたので、日本語教室が終了するのはさみしい。」

・「子どもたちはとても可愛く、遊ばせるうちに、だんだんなついてくれたので、日本語教室が終了するのは残念。当初は、イスラム文化を知らないので不安があったが、だんだんお互い慣れてきた。けがをさせないように、ということにもっとも留意した。慣れてきてから、甘えて泣かれるようになった。幼稚園の子どもは、父親（＝アフガンフェロー）が迎えに来ることもあった。幼稚園児は日本語の習得も少しずつ進んでいるようだ。」

・「お世話をした子供たちは、0歳児から5歳児まで年齢の幅があり、それぞれ発達段階が異なるので、異なる遊ばせ方を工夫する必要があった。全員、日本語はできないが、中には、英語を少し理解する子供もいた。毎週1回接しているうちに、だんだん慣れてきて、なついてくれた。子供によって、おもちゃの好みも異なるので、子どもごとに異なる対応が必要だった。日本語教室を受講している母親たちとあまり交流できなかったのが残念だった。」

・「言葉の壁があったが、楽しく遊ばせることができた。慣れてくるにつれて、甘えたり、なついてくれて、可愛い。遊びの好みも子どもごとに異なるので工夫が必要だった。日本語教室の受講者の出欠に関する情報が事前にわからず、集会所に行ったところ、子どもの数が少ないこともあった。事前に何人の子どもが参加するかわかるとよかった。」

以上のように、概ね、シッターボランティアからは、子どもたちを遊ばせる経験を好意的にとらえており、子どもたちとの交流を通じて異文化理解を深めたように思われる。

#### 4) 避難民・住民交流会の開催：

地域住民と避難民家族との異文化理解を深め、共生に向けた環境づくりを促進するため、職員住宅集会所において交流会を開催した。当日は、集会所に入りきらないほどの住民家族が参加し、大いに盛況であった。（別添資料2参照）

具体的には、以下のとおり開催された。

- ① 日時： 2022年11月6日
- ② 会場： 滝の水住宅集会所
- ③ 参加者：合計46名（うちアフガンフェローおよび家族：18名、滝の水住宅日本人住民：19名、日本語教室教師：2名、名大関係者：5名、その他：2名）
- ④ 内容： 自己紹介、アフガニスタンの政治状況・文化の紹介（民族衣装、言語、イスラム慣習、食文化など）。（アフガンフェローが伝統的手作りお菓子を用意。その他の茶菓は、本事業から支出。） 、職員住宅でのルールの確認、ゲームなど。

この交流会は、大変和やかな雰囲気の中で開催され、相互理解・交流の促進に大変有意義な機会となった。日本人住民は家族全員で参加しており、関心の高さがうかがえた。住民の中には、なぜ、多くのアフガニスタン人が当該住宅に入居することになったか事情を知らない方々も多かったが、大学を挙げて彼らを支援していること、アフガンフェローがなぜ母国から避難することになったか説明したことにより、彼らに対する理解が深まったように思われる。後日、滝の水住宅住民である教員から、彼らに対する住民の態度について「ある時から潮目が変わった」と聞いたが、この交流会がその契機になったのではないかと思われる。

#### 5) 生活再建支援：

退避者の生活再建と就労を支援するために、名古屋外国人雇用サービスセンター、名古屋難民支援室等との連携を図り、就労機会と本人の希望職種・スキルとのマッチングを支援した。

名古屋大学によるアフガンフェローおよび帯同家族の支援期間は1年間である。支援期間終了後は、自立して日本社会に適応し生活していくことが求められることから、名古屋外国人雇用サービスセンターのアドバイザー（本研究科修了生）や、名古屋難民支援室（代表は、本研究科修了生）と連携し、難民申請、就労機会、査証の切り替えなどについて助言を得る機会を提供するとともに、支援のネットワークを構築した。

たとえば、アフガンフェローは、支援期間終了後、職員住宅（帯同家族のいるアフガンフェロー）や留学生宿舎（単身者）を退去する必要があり、市営住宅など学外の住宅への転居が必要であった。市営住宅への転居を希望したアフガンフェローが上記アドバイザーらと申請の手続きを行ったところ、市営住宅の多くは風呂釜や給湯器が設置されておらず、入居者が自ら購入し、設置する必要があることがわかったが、その費用が高額であり、入居が難しいことが判明した。そこで、当方と名古屋市役所の担当課、上記2名の修了生とでオンライン協議を行い、名古屋大学が受入れたアフガンフェローについては、本学からの証明書を提出すれば、名古屋市が風呂釜・給湯器を無償で設置したうえで、1年間（延長可）、無償で市営住宅に入居できることになった。これにより、生活の基盤となる住居の安定確保が可能となり、生活再建の実現に向けた大きな一歩となった。また、本学国際連携課と連携し、名古屋外国人雇用サービスセンターによるアフガンフェロー向け個別面談・就労相談の機会を得た。

本研究科で受け入れたアフガンフェロー6名のうち4名は博士後期課程（2022年10月に2名、2023年4月に2名）に進学したことから、学生の身分となった時点で、アフガンフェローとしての支援期間を終了した。進学により、早急に就労機会を確保しなければならない状況は当面、回避されたものの、自立と生活再建に向けた継続的な努力が必要なことは言を俟たず、今後も見守っていく必要があると考えている。残り2名のうち、幼児を子育て中の一人はアルバイト職を希望している。もう1名については上記のネットワークやNPOの支援を得ながら、求職活動を続けており、本学による支援期間の終了する2023年6月までに就職のめどが立つよう、支援を継続している。

### 3. 総括

2021年8月15日に起こったアフガニスタンにおける政変により、同国からの元留学生（ほとんどはJICAの支援により日本に留学した政府職員）から日本への退避を求める緊急の連絡が元指導教員らに届き、松尾総長（当時）ら大学執行部との協議の結果、2021年10月、総長裁定により、大学として彼らをアフガニスタン・アカデミックフェローとして受け入れ、1年間支援することが決定された。しかし、学生でも教職員でもない彼らの受け入れについては、当初、さまざまな課題があった。特に、期間限定で日本に留学する留学生と異なり、母国へ帰国するという選択肢を事実上失った彼らが、日本社会に適応し、日本において生活再建を遂げるには、本人らの努力だけでなく、地域社会が彼らを受け入れ、理解し、支援することが不可欠である。本事業の実施により、当該職員住宅の住民、学校・保育園、名古屋市、NPOsなど多くの組織・個人が支援のためのネットワークを構築し、積極的な活動が見られたことは大きな収穫であった。アフガンフェロー家族は、名古屋大学による支援期間終了後、自立して地域社会に根付いていくことが求められるが、本事業の実施により、そのための助走となる重要な機会を提供できたと感謝している。

【別添資料1】

2022年11月16日 邊見先生：滝の水住宅日本語教室・シッター



日本語教室を行う=滝ノ水住宅の集合所=

2023年2月6日 水野先生：滝の水住宅日本語教室・シッター



2023年2月15日 邊見先生：滝の水住宅日本語教室・シッター

